ドイツの地理学

森 川 洋* 由 井 義 通** フンク カロリン***

Geography in Germany

Hiroshi MORIKAWA*, Yoshimichi YUI** and Carolin FUNCK***

Abstract

The aim of this paper is to overview recent geographical studies in Germany. Traditionally, German geographers have achieved significant results from research and theoretical studies. In particular, regional geographical studies have produced important results.

After 1970, geography in Germany changed due to the influence of globalization and generational change. German geographical studies began to interact closely with English and American geographical studies. There were several remarkable tendencies. The first was the argument for new regional geographical studies and a system of geography. The second was studies of localities and provinces, as proposed by Schöller. The third was social geography, which places emphasis on human behavior.

According to lists of major geographical journals in Germany, there is a good balance between physical geography and human geography. Ecological studies and social geography are popular in German geography.

Recently, there has been an increase in the number of English-language articles in Geographical journals. German geographers aggressively contribute papers in English to communicate the outcomes of their research. German geographers have also promoted education on geography, and several plans have been proposed for environmental studies. Education on geography has contributed to a strengthening of education for sustainable development (ESD), which is encouraged by UNESCO.

The status of geography continues to improve in Germany; however, it is not a major subject in German education. German geographers have improved education on geography in schools and Universities.

Many personal interactions between Japanese and Germany geographers are continuing, and geographers from both countries have organized the Japanese-German Geographical Conference.

Key words : history of geography, Germany, geographical education, ESD, social geography

キーワード : 地理学史, ドイツ, 地理教育, ESD, 社会地理学

---

* 広島大学名誉教授

** 広島大学教育学研究科

*** 広島大学総合科学研究科

* Emeritus professor, Hiroshima University, Hiroshima, 739-8522, Japan

** Graduate School of Education, Hiroshima University, Higashi-Hiroshima, 739-8524, Japan

*** Graduate School of Integrated Sciences, Hiroshima University, Higashi-Hiroshima, 739-8523, Japan

I. はじめに

伝統あるドイツ地理学は、地誌学、地域研究、社会地理学、地理哲学など、近代地理学の確立期から今日に至るまで世界の地理学をリードする役割を果たしている。1970年代における計量革命期においては英米の地理学に対して多少の遅れはみられたものの、ドイツ地理学が世界の地理学の主流部分をなすことに変わりはない。本稿は、ドイツにおける人文地理学の動向について、第二次世界大戦後の概要、地理教育改革、日独地理学会議の活動などに焦点を絞って概要を述べることを目的とする。

上記の目的のために本論はドイツ地理学の発達史とその特徴を地理教育をも含めて簡潔に紹介するが、ドイツ地理学は国境を越えてオーストリアやスイスを含めて学界的なまとまりがあるので、第II章ではドイツ語圏における人文地理学の歴史を捉えることにする。ただし、旧東ドイツの地理学は社会主義国家のもとで独自の発展を遂げたが、今日では消滅しているので、本論では触れないことにする。

本論では、できるだけドイツ地理学の全貌を捉えることに努力している。まず第II章ではドイツにおける人文地理学の歴史的な発展過程と特徴を紹介し、第III章では学術誌に掲載された論文から最近の研究動向を分析し、第IV章と第V章では最近における地理学会の動向や大学組織、地理教育の動向を紹介し、最後の第VI章ではドイツ地理学の日本との関わりについて考察する。

ただし、ドイツ地理学の動向について、自然地理学の動向も踏まえて論を記述することが望ましいが、自然地理学の動向に関しては、ドイツにおける地理学関連学術雑誌に掲載された論文数の分野別分析において若干触れるのみにとどめ、本稿は著者の専門分野、原稿枚数等を考慮して人文地理学の動向に限定して記述する。

II. 第二次世界大戦後のドイツ語圏の地理学

1) ドイツ語圏人文地理学の歴史

ドイツといえば、HumboldtやRitterによっ

て近代地理学を創出した国である。その後においてもRatzelやSchlüter、Hettnerなど著名な地理学者を輩出し、少なくとも第二次大戦までは世界の地理学をリードしてきた国といえる。しかし、戦後になると地理学の主流は英語圏に移り、ドイツの地理学は出遅れることになった¹⁾。それにはいくつかの理由が考えられる。その1つは新しい地理学の登場である。Hettnerの地誌図式(länderkundliches Schema)は、人文地理的事象を自然によって与えられた条件のもとで考え、近代社会には十分妥当しなくなったこともあるだろう。また、彼は地理学を大学レベルの学問に発展させるために、地理学を入門学とみていたKantの思想を曲解して、地理学を空間科学としたのも問題であった(Werlen, 1997)。フランスではVidal de la Blacheは地理学を社会科学と考えていたのに対して、ドイツ語圏の地理学は自然科学のなかで発展してきたため、社会科学との接触が少なかったし、ナチス時代のイデオロギー統制も不利に作用した。ドイツは2度の大战に破れ、国力を失い、第二次世界大戦後は国土が分断されたことも地理学の発展にとっても打撃となった。

しかも戦時中に発展を遂げた地政学(Geopolitik)は大きな後遺症を遺した。第二次世界大戦中には多くの地理学者がナチス体制のイデオロギーや実務にまき込まれた苦い経験から、戦後の人文地理学の理論的研究や法則追究を故意に軽視する傾向があった(Blotevogel, 2000)。その反面、ドイツ学術振興協会(DFG)の援助のもとに外国調査が盛んに行われ、その方面では大きな成果をあげてきた。

戦後のドイツ語圏ではBobekが戦後約20年間にわたって基本的パラダイムをなしてきた(Bobek und Schmithüsen, 1949; Bobek, 1957)。Bobek(1957)によれば、独自の秩序原理をもった無生物界、生物界、精神界からなる3現象が相互作用によって統合されたのがラントシャフト(Landschaft)であり、研究の中心に位置づけられてきた。ラントシャフトは自然地理学的内容と人文地理学的内容を含み、一体性を保持していたところから、その古い体質に対する批判は以前から

存在しており (Wardenga, 2000), 1960 年代には地誌学中心のパラダイムは旧西ドイツにおいても危機的状況にあった。

このような地理学の体系のもとで、ドイツの戦後における人文地理学を特徴づけるものとして外国地誌研究とともに社会地理学がある。ドイツにおける社会地理学の出発はイギリスやフランスに比べて遅れており、戦後になって急速な発展を遂げた分野である。その発展に主導的役割を果たしたのは Bobek (1948) と Hartke であったが、両者の地理学や社会地理学に関する考え方は大きく異なっていた。Hartke (1956, 1959) は人々の日常的行動の空間的パターンやその到達範囲が境界設定に利用されるとしており、自然的要因を重要視しない点では新たな発想であった。彼は、すべての人間はその活動によって特定の社会集団—主として職業グループ—に所属し、自然に対してある特定の支配的な価値観や規範をもつので、事実自体よりも事実に対する行為者の評価の方が重要であると考えた。

Werlen (1997: 27) は、空間よりも人間活動そのものを地理学の研究テーマとしてはじめてとりあげたのは Hartke (1956, 1959) であるとして高く評価するが、人々の行動に対する説明や分析指標には問題があり、社会地理学を大きく前進させることはできなかったと述べている。とりわけ、都市を対象とした研究では十分に効果を発揮することができず、1977 年に社会地理学の教科書ともいえる『社会地理学』が刊行されたときには、ミュンヘン学派の社会地理学は色あせていた (Thomale, 1984)。

これより先、大学紛争さなかの 1969 年に開催されたドイツ地理学会キール大会では、学生や若い地理学者は地域の全体性を重んずるラントシャフト地理学や地誌学、それらを基盤とした従来の地理教育を批判の中心にあげた (Fachverband, 1970)。ラントシャフトは空想的な全体であり、不毛の議論であるとし地誌学は偽学問であると非難した。学生たちの思想的背景にはキール大会の前年 (1968 年) に発表された Bartels (1968) の教授資格論文があった。それは「地理学の例外

主義 (exceptionalism)」を非難した Schaefer の発想をドイツ地理学界に導入したものであり、Bartels は英語圏で発展を遂げた理論計量地理学に賛同し、距離要因が決定的に重要であると考えた。

キール大会はドイツ語圏地理学のパラダイムに大きな転換をもたらし、大学の地理学教師に強烈なショックを与えた (Popp, 1983)。その後 10 年間には地理教育におけるカリキュラムや学習計画の改訂が行われ、地誌部門は大きく後退したが、奇妙なことに、この時期には地誌書がこれまで例をみないほど多く出版された。

1970 年代には人文地理学の研究に計量的手法が普及し、1974 年には計量地理学のシンポジウムがギーセン大学で開催された。しかし、英語圏から導入された計量的分析は応用地理学の分野では発達したが、人文地理学の主要な研究においては依然としてミクロ分析が支配的で、仮説検証的方法は実証研究にそれほど大きな影響を与えることにはならなかったとみる人もある (Lichtenberger, 1978)。

1980 年代になると、戦後独自の途を歩んできたドイツ語圏地理学も、地理学者の世代交代や文化的なグローバル化の影響のもとで、英語圏地理学との交流が活発になってきた。それまでも、英語圏地理学にみられるように、解釈論的文化地理学 (人文主義地理学) やポストマルクス主義の社会批判的人文地理学もまったくなかったわけではないが、英語圏地理学におけるように、大きな潮流までには成長しなかった。マルクス主義地理学は、旧西ドイツが冷戦の最前線に位置し、しかも旧東ドイツのマルクス主義地理学は公的にもまったく説得力を欠く状態であったため、何ら重要な意義をもたなかったし、マルクス主義者は大学制度の上でも差別を受けていた。

しかし、近代末期社会²⁾ の到来とともに人々は多様な価値観をもつようになり、学問の世界においても多様なパラダイムが共存することとなった。1970 年代以降のドイツ語圏人文地理学の発展をみると、相互に密接な関係をもつ次の三つの動向が注目される。その第一は、1970 年代末に

生じた新しい地誌学や地理学の体系に関する論議である。キール大会に対して不快の念をもって執筆された Wirth (1979) の『理論地理学』の体系は、それほど評価されず、Bartels (1980) らとの間に激しい論争を巻き起こした。

第二は、ドイツ地理学会ミュンスター大会 (1983 年) で Schöller (1984) の発案によって作業グループが結成された「地域意識と国内地誌」の研究である。旧西ドイツでは道路建設や空港建設など公共事業に対して地元民の反対運動が高まったのを契機に、人々の空間意識や同じ空間認識をもつ地理的範囲といった問題が重要な関心事となった。さらに空間整備政策においても、内発的ポテンシャルがとりあげられるようになり、地域的アイデンティティに関する関心が高まってきた。その後の Blotvogel *et al.* (1986, 1987) による地域意識の研究は、1990 年代半ば以降に世界的に注目されるようになった文化的転換 (cultural turn) の考え方を先取りしたものとも考えられ (Werlen, 2010)、大きな反響を呼んだ。

第三は、行為重視の社会地理学の発展である。1980 年代は社会学が空間重視に転換した時代であるが、そのなかで注目されるのが Werlen の社会地理学である。彼は 1986 年に学位論文『行為理論に基づく社会地理学』を刊行した後、教授資格論文『日常的な地域化の社会地理学』は 2 巻に分けて刊行している。彼の著書については多くの書評や論文が書かれ、51 回ドイツ地理学会ボン大会 (1997 年) では特別フォーラムが企画され、多くの地理学者の注目を集めた。

Werlen が考える近代末期社会の社会存在論に適合した行為重視の社会地理学 (handlungszentrierte Sozialgeographie) は、Bobek や Hartke のように社会集団を対象としたものではなく、個人の空間的行為を直接対象とするものである。今日の近代末期社会では人々は脱定着化 (Entankerung, unembeddedness) して各個人がさまざまに活動するので、地域内部のもつ等質性は薄れており、生活形態や生活スタイルはグループや階級に特有のものとして分類されるのではなく、個人的決定の表現であるとみるものである。

したがって、身体的な空間的制約や日常生活圏としての地域的まとまりを考慮して行為地理学をもって捉えようとするものである。

Werlen に対する評価はさまざまである。彼は今日のグローバル化過程に関する地理学論争を社会理論の中心課題と結びつけることに貢献するとともに、ドイツ語圏研究者を今日の英語圏の社会文化地理学に近づけることになったとみる人もある。Weichhart (1997) は、「ヴァーレンのこの 2 冊の著書 (Werlen, 1995, 1997) を通じて、地理学の方法論や理論に対する論議は新たな質の次元にまで高められた」と評価している。

このようにして、最近になってドイツ語圏の人文地理学は英語圏のそれに近づいてきた。代表誌『*Erdkunde*』でもすべての論文が英語で発表されるようになった。今後は英語圏地理学との交流はますます緊密になり、その個性的特徴は薄らいでくるものと考えられる。

2) ドイツ地理学の特徴

ドイツにおいて地理学の社会的評価はそれほど高いとはいえないが、日本よりは高いようにみえる。大学紛争当時学生は、上述のようにドイツ地理学や地理教育を厳しく批判したが、今日の地理の卒業生はデータ分析能力に優れ、柔軟な思考、チーム作業に適するなどの評価を受け、ディプロムコースの学生の就職も悪くない。ドイツはこれまで著名な学者を輩出した国であり、地理学もある程度の社会的評価を得ているように思われる。とりわけ、1965 年以後における空間整備政策では「同等の生活条件」の確立が目標とされ、クリスタラー (1969) の中心地理論に基づく「点と軸による開発構想」が用いられているため、中心地は社会的によく知られた用語となっている。

各州によるこれまでの長期にわたる空間整備計画のなかでは、中心地の振興政策には種々の批判もなされてきたが、その重要性は依然として評価されている。中心地政策の批判 (1996 年) の際には地理学界でも議論され、代表誌『*Erdkunde*』に特集号が組まれたこともある。空間研究の学術誌『*Informationen zur Raumentwicklung*』や

『*Raumforschung und Raumordnung*』のなかでも地理学者の発表論文は少なくない。

もう一つの社会的貢献は、ライプニッツ地誌研究所 (IfL) が再統合後の 1992 年にライプチヒに創設されたことであった。1972 年にはボンの地誌研究所は閉鎖されたが、新たに地誌研究所が創設されたのはドイツ語圏地理学にとって明るいニュースである。機関誌『*Europa Regional*』が発行され、EU 諸国や旧東ヨーロッパの地域構造の研究などに成果を上げてきた。最近ではドイツ統合 10 周年の記念事業として『ドイツ共和国アトラス (*Bundesrepublik Deutschland Nationalatlas*) (全 12 巻)』が 1999 ~ 2005 年に刊行されたのが注目される。再統合後 10 年の国土に関する関心が高く、その後も国民の強い要望に応えるためにコンパクトにまとめた『ドイツアトラス (*Deutschlandatlas*)』が出版され、好評を博している。

III. 学術雑誌の論文題目からみた ドイツ地理学の動向

21 世紀に入ってからドイツ地理学の研究動向を概観するために、ドイツの主要地理学雑誌である『*Die Erde*』『*Geographische Zeitschrift*』『*Erdkunde*』の総目次から、分野別動向について分析を試みた。分析期間を 2001 ~ 2010 年に限定したのは、分析対象とする『*Die Erde*』誌が 2001 年に編集方針が大きく変化してテーマ別の論文構成となったために 2000 年以前との比較ができなかったからである³⁾。

ドイツ地理学の 2001 ~ 2010 年の地理学雑誌における題目の変化をみると (表 1)、『*Die Erde*』誌は 2001 年以降毎号特集号となっており、その内容は人文地理学と自然地理学、およびそれぞれの地理学の貢献、地域研究がバランスよく構成されている。2001 ~ 2006 年にかけては、人文地理学や自然地理学への貢献をテーマとしているが、人文地理学分野と自然地理学分野で大きく分けたような内容構成で、共通テーマによる論文構成ではなかった。ただし、地理学の方法論や理論的な研究成果からなる論文も多く、イギリスにお

ける『*Progress in Human Geography*』や『*Progress in Physical Geography*』誌のような性格をもった内容構成であった。分析対象期間全体に特徴的なのは、環境問題をテーマとした特集号は対象期間中に最も多く共通テーマとなっており、かかる課題に対する地理学の社会貢献としてドイツにおいても地理学の有用性をアピールできている。しかし、2007 ~ 2010 年においては方法論や理論をテーマとした特集テーマが少なくなり、人口地理学や都市地理学関連のテーマなどの比較的絞られたテーマによる特集に変化した。人文地理学関連のテーマでは、都市地理学関連の特集がメガシティや大都市地域をテーマとして組まれている。人口移動やグローバリゼーションに関連したテーマでは経済地理学関連の論文がみられるものの、EU に統合されるヨーロッパの産業の動向や政治地理学関連のテーマについては少しずつ増加しているのが特徴である。

同様に、『*Erdkunde*』誌で最も多い分野は景観生態や環境に関係した論文で、次いで社会地理学、地理学理論の分野の論文も多い (表 2)。「*Erdkunde*」誌は毎号挿入されているカラー版の主題図も自然地理学と人文地理学のバランスがとれている。また地域研究のフィールドは、ヨーロッパよりもアジアが多くなっている。「*Erdkunde*」誌は編集者が数人で、しかも長期にわたって編集者の変更がないのも特色である。一方、『*Geographische Zeitschrift*』誌は経済地理学分野が最も多く、論文総数の約 3 分の 1 を占める。次いで都市地理学、社会地理学、文化地理学が多いが、それらはいずれも経済地理学の 4 分の 1 程度にすぎない (表 3)。

また、ドイツでは 2 年に 1 度刊行される『*Geographisches Taschenbuch*』に地理学者が網羅的に紹介され、大学地理学教室やその研究活動・刊行物をはじめ、地理学会や関連学会の情報が詳細に記されている。これらの情報によれば、この 10 年以上にわたって地理学教室の廃止や大学の統廃合があちこちで進行したようであるが、そのなかで伝統があるボン大学やハイデルベルク大学の地理学教室が以前からの地位を確保しているの

表 1 『Die Erde』誌における 2001～2010 年の特集テーマ。

Table 1 Special Issues in “Die Erde”, 2001-2010.

年次	巻	号	特集テーマ	テーマ分類
2010	141. Jahrgang	Heft 4	景観生態学を超えて	環境
2010	141. Jahrgang	Heft 3	壊れやすい風景	環境
2010	141. Jahrgang	Heft 1/2	人口移動の新しい地理学	人口
2009	140. Jahrgang	Heft 4	メガシティ研究	都市
2009	140. Jahrgang	Heft 3	アメニティの人口移動	人口
2009	140. Jahrgang	Heft 2	混合型の問題	環境
2009	140. Jahrgang	Heft 1	メガシティのインフォーマルなダイナミクス： ダッカ、バングラデシュ	都市
2008	139. Jahrgang	Heft 4	再都市化	都市
2008	139. Jahrgang	Heft 3	グローバリゼーションと開発	経済・開発
2008	139. Jahrgang	Heft 1/2	霧の研究	自然
2007	138. Jahrgang	Heft 4	フェルディナント・フォン・リヒトホーフェン	学史
2007	138. Jahrgang	Heft 3	自然地理学	自然地理
2007	138. Jahrgang	Heft 2	商品の連鎖	経済地理
2007	138. Jahrgang	Heft 1	地中海の景観	地域研究
2006	137. Jahrgang	Heft 4	人文地理学	人文地理
2006	137. Jahrgang	Heft 3	気候変動と人間の安全保障	環境
2006	137. Jahrgang	Heft 1/2	ヨーロッパの大都市地域	都市
2005	136. Jahrgang	Heft 4	自然地理学	自然地理
2005	136. Jahrgang	Heft 3	人文地理学	人文地理
2005	136. Jahrgang	Heft 2	特集：都市生態学	環境
2005	136. Jahrgang	Heft 1	自然地理学	自然地理
2004	135. Jahrgang	Heft 3/4	北アフリカの自然	地域研究・自然
2004	135. Jahrgang	Heft 2	自然地理学	自然地理
2004	135. Jahrgang	Heft 1	人文地理学	人文地理
2003	134. Jahrgang	Heft 4	自然地理学	自然地理
2003	134. Jahrgang	Heft 3	特集：ベルリンの変化する地理学の見方	都市・地域研究
2003	134. Jahrgang	Heft 2	特集：災害に対する地理学の貢献	災害
2003	134. Jahrgang	Heft 1	人文地理学	人文地理
2003	134. Jahrgang	Sonderheft 1	ベルリン地理学会の 175 年（別冊）	学史
2002	133. Jahrgang	Heft 4	特集：フードシステムの地理学	経済
2002	133. Jahrgang	Heft 3	自然地理学	自然地理
2002	133. Jahrgang	Heft 2	特集：ナミビア	地域研究
2002	133. Jahrgang	Heft 1	人文地理学	人文地理
2001	132. Jahrgang	Heft 4	自然地理学	自然地理
2001	132. Jahrgang	Heft 3	特集：チリ	地域研究
2001	132. Jahrgang	Heft 2	人文地理学	人文地理
2001	132. Jahrgang	Heft 1	特集：熱帯林の生態系	環境

http://www.die-erde.de/html/erde_online.html (2011 年 12 月 28 日閲覧) より作成。

は注目される。しかしながら、自然地理学および人文地理学関連の数多くの貴重な地図を提示した『*Petermanns Geographische Mitteilungen*』の廃刊にみられるように必ずしも地理学の将来を楽

観視できるものではない。

IV. ドイツの大学地理学における近年の変化

ドイツでは 1995 年に設立され、25,000 会員

表 2 タイトルからみた『Erdkunde』誌掲載の分野別論文数 (2001～2010 年).

Table 2 Categorized articles in “Erdkunde”, 2001-2010.

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	総数
(自然地理)											
環境	1	4	4	8	7	12	13	3	10	4	66
景観生態学	5	4	5	7	8	10	14	1	2		56
気候・気候史	4	4	7	3	2	6	7	1	8		42
地形	7	2	2	1	5	2	2	1	2		24
高山 (氷河・山岳)	7	6	6	6	1	3	3	4	8	6	47
植生・土壌	1	3	5	3	4	5		4	9		34
水文学			1	2		2	2	1	3		11
(人文地理)											
文化・宗教								6	4	3	13
歴史	1	3	1		1	3					9
経済	3	6	5	2	2	3	5	5	11	3	45
ツーリズム・観光	1	1							2		4
農業	2	4	5	1	1	3	1	1	1	2	21
社会		5	1	8	2	10	6	6	2	3	43
都市・集落	5	10	1	5	1	5	1	8	7	2	45
人口				3	1			3	1		8
政治				2		1	3	2	3	4	15
開発・計画	1	1		5	1	3	6	6	5	5	33
(共通)											
地図学	2	3		3		1	2		1		12
理論	5	4	2	3	3	10	9	1	3	3	43
地理学史	1	1	4	3	2	3	2		2		18
情報・リモートセンシング	1	2	1								4
											0
(研究対象地域)											0
世界							4	2	6	5	17
アジア	4	8	4	4	1	6	9	5	16	5	62
アフリカ	2	9	1	4	2	2	6	7	5	3	41
北アメリカ	2	1	1	2		3	4	2	1		16
中央・南アメリカ	6		5	2	1	1	5	2	10	2	34
オセアニア		1				1				2	4
ヨーロッパ	1	1	2	2	8	4	6	6	11	5	46
ドイツ	3	1	2	9	9	2			10		36

2007 年まではドイツ語による総目次・分類のみであったが, 2008 年以降に英語による総目次・分類が付加された。
2009 年は総目次を入手できず, 著者が論文数を集計。

からなる「ドイツ地理学連盟 (Verband der Geographen an Deutschen Hochschulen)」が組織化されているが, その連盟の傘下にはドイツ応用地理学協会, 大学地理学教育協会, ドイツ学校教

育地理学協会, そして大学所属地理学者協会が集まっている。後者は大学に所属する 850 人の地理学者の代表組織の役割を果たしている。現在, 60 の大学や教育大学に地理学科が存在するが,

表 3 タイトルからみた『Geographische Zeitschrift』誌掲載の分野別論文数 (2001～2010 年)。

Table 3 Categorized articles in “Geographische Zeitschrift”, 2001–2010.

分野	年次										総計
	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	
(自然地理)											
環境		1				1		1		1	4
気候・地形		1					1				2
災害						1					1
(人文地理)											
文化	1		2		5	2		1			11
歴史				1					1		2
経済	6	11	7	3	4	5	2	8	1	3	50
観光		1							2	1	4
空間		1				1	1			1	4
社会	1		1	2	2		2	1	1	1	11
都市	7				1		3	1	5	2	19
住宅				3		1					4
人口							2				2
政治	2		2				1		2	3	10
開発						1				1	2
(共通)											
地図学									3		3
理論・方法論				1	3	1	1			1	7
学史・思想				5	1		1				7
情報・リモートセンシング			1								1
総計	17	15	13	15	16	13	14	12	15	14	144

一つの大学で複数の学科をもつ場合もある (Verband der Geographen an Deutschen Hochschulen, 2011a)。それらの学科は社会科学系、理学系や、環境科学系など、さまざまな学部にも所属している。

ドイツの大学で地理学を専門とした場合、修士、国家試験に基づく高等学校指導資格、ディプロム (Diplom) という科学技術科目の学位の3つの資格のいずれかを得て大学を修了することになっていたが、とくに修士や、高等学校指導資格を目指した場合は、副専攻が必ず必要であった。地理学者の就職先は大学で獲得した資格に関係して学校教育や、地域計画がおもな分野である。この大学教育制度が、21世紀に入ってから

大きく変化した。

1999年にヨーロッパ内29ヶ国の文部大臣が「ボローニヤ宣言」でヨーロッパにおける大学改革に拍車をかけ、そこから「ボローニヤ・プロセス」という大学改革が各加盟国ではじまる (フンク, 2009)。宣言では、6つの目標が設定されているが、そのなかでとくに、学部 (Bachelor) と大学院 (Master) という、2段階からなる教育課程を導入するという目標と、学生の最大限の移動とヨーロッパ内の交流を推進するため、90年代に導入された ECTS (European Credit Transfer System ユーロッパ単位互換制度) のような単位互換制度を導入する目標が、ドイツの大学制度を根本から揺るがした。ボローニヤ宣言では、

第1学位までは最短3年間が必要で、その資格は労働市場で実際に役に立つものとされる。

1999年当時、ドイツでは大学で最初に得られる学位は修士、高等学校指導資格、ディプロームのいずれかであり、日本の大学卒業に相当する学位はないため、学位を獲得するまでは大学では最低限5年間、専門大学では4年間かかった。

従来の大学制度について、学位までの期間が長く、学生に対する指導が不足していたため修学を中断する学生が多く、または得られた学位が実際の仕事につながらないなど、さまざまな問題点が指摘されていた。そこでボローニヤ・プロセスをきっかけに、高等教育の3段階構造（Bachelor-Master-Doktor）への変化と単位の互換制度の導入が進められた。まず、BachelorとMasterの学位を獲得するために、それぞれ3年間と2年間かかる新しいプログラムが設置された。プログラム内容については、互いに関連する授業を「モジュール」（Modul）という範囲にまとめ、各モジュールを受講する学年学期を履修計画で設定し、モジュールの内容をシラバスで明確に表すことになった。一つのモジュールは講義と演習、または実習からなる場合が多い。モジュールごとに試験を実施し、各試験の合計点が学位に計算される。学位の成績が修学の最後に行われる修士論文と口頭試験、筆記試験のみで決定された従来の制度と異なり、1年生から卒業までの教育課程がすべて学位の結果に反映される制度となった。2011年現在は、新プログラムとモジュールへの移行がほとんど完成している。

ドイツの地方分権制度のなかでは高等教育に関する決定権の多くが国ではなく、州がもっているため、高等教育の制度が州により異なっている。そこでドイツの大学の地理学では改革前のディプロームまたは修士までの旧プログラムについて全国の大学に跨って内容の半分程度を統一した、拘束力のあるカリキュラムが設定されていた。そのため、在学中に他大学へ編入することも可能であった。2003年の州文部大臣会議のさまざまな決意を受け、大学所属地理学者協会は新プログラムの設定とそのモジュール化に関する方針を検討

する委員会を設置した。そこで設定された基本方針の一つは、Bachelorプログラムで地理学全体の基礎を教え、専門分化を避け、地理学の学問としての統一を守ることであった。プログラム内容は自然地理学、人文地理学、巡検を含める地域地理学、方法論、インターンシップも含める実用地理学、副専攻と卒業論文からなる。卒業論文は従来の制度と比べ、非常に短いものとなる。

高等学校教員資格の科目としての位置づけが強かった地理学は、新プログラムで科目の統一守ることに苦労した。地理学としての統一性を失い、地理学の各分野への分裂が進めば、高等教育や社会における影響力を失い、地理学専門の教員枠も削減される危険性がみえたため、ドイツ大学所属地理学者協会が地理学の基礎的な内容を教える新プログラムの設定を推薦したのである。その努力もあり、Bachelor段階で各大学が統一した地理学プログラムを提供することに成功したが、Master段階では、他科目との協力体制も多く、地理学がプログラム名から消えてしまった例もみられる。2011年5月現在、ドイツの大学では地理学に直接関連するMasterプログラムは61プログラムが提供されているが、そのなかに「気候変動」「都市・地域開発研究」のように、プログラム名に地理学を含めていないものもみられる（Verband der Geographen an Deutschen Hochschulen, 2011b）。ほかに、他科目と共同で設定されているプログラムもある。

2009年に3ヶ所の大学で地理学教員に聞き取り調査を行ったが、改革の結果、教育プログラムの構造がわかりやすくなり、卒業までの必要学期数が短縮された一方、地理学の特徴である独自な問題分析の余裕がなくなったとの指摘があった。その上、地理学では以前、理工学の資格であるディプロームで大学を終えた学生が多く、その資格は国際的に高く評価されていたが、3年間のBachelor学位が逆に、国際的に評価されない恐れがある。また、地理学の場合、留学し、留学先での研究結果を卒業論文にまとめることが少なかつたが、3年間の短いBachelorプログラム内では留学が不可能であり、「ボローニヤ宣言」

の目標であった学生のヨーロッパ内の活発な移動がみられない (Bargel *et al.*, 2008)。

教員にとっては新しい単位制度の結果、試験が増え、採点と評価書の作成などが講義終了後も続き、地理学に必要な現地調査や巡検の実施の時間が確保できなくなった。研究と教育内容の充実に使用できる時間が試験の増加により削られたことが最も重要な問題である。一方、Bachelor プログラムで要求されている技能力、職業関連技能の授業は応用的性格の強い地理学では以前から提供されている大学が多く、その点について、改革の実施が容易であったといえよう。

ドイツの大学は今後、今まで入学試験という制度をもたなかったなかでどのように Master プログラムに進学する学生を選ぶかという大学内の問題と、3 年だけで大学を終えた Bachelor 資格の学生は労働市場で受け入れられるかどうかという社会的問題に直面する。

V. ドイツ地理教育の動向

ドイツにおいては大学教員や教育現場の教師達、あるいは州の教育省スタッフによる地理教育の活動が活発に行われている。1970 年代の地誌教育の見直しや系統地理学の導入、あるいは地域科学としての地理教育の追求などの西ドイツにおける地理教育の改革運動については、水岡 (1981) に詳細に紹介されているので、本章ではそれ以降のドイツにおける地理教育の動向を述べる。地理教育のワーキンググループは 1983 年に設立され、Mayr (当時ミュンスター大) と Meusburger (ハイデルベルク大) のリーダーシップの下、ミュンスターで作業部会を設立し、地理教育に関心のある地理学者のグループによって活動が開始された。この活動はメンバーを固定しない開放的な形式をとり、1985 年以降もさまざまな分野の研究者が参加して活動が継続され、Schmude (ミュンヘン大) と Nutz (ケルン大) などへと引き継がれた後、2009 年 6 月に Jahnke (フレンスブルク大) が活動を継いでいる。上記の地理教育のワーキンググループ活動は教育資本と教育計画の課題を中心に取り組み、1990 年代半ば以降のド

イツの地理学研究と地理教育の発展につながったといわれる。

近年、ドイツの地理教育において主流を占めているのが持続発展教育 (Education for sustainable development, ESD) である。日本が国連において提唱した ESD の学習内容についても、ドイツでは地理教育において積極的に環境学習が取り組まれていたが、草の根的な教員研修が活発に行われ、日本以上に ESD に対して熱心に取り組みがなされている。

ESD への取り組みは従来の熱心な環境学習の発展的展開といえるが、これ以外にも国際的な地理教育の啓蒙活動において活躍した Haubrich (フライブルク大) の貢献が大きい。Haubrich は、国際地理学連合の地理教育委員会 (IGU-CGE) において 1992 年の地理教育国際憲章「International Charter on Geographical Education」のとりまとめに際して中心的役割を果たした。1992 年はリオデジャネイロで環境と開発に関する国連会議 (地球サミット) が開催されて、「環境と開発に関するリオ宣言」とその行動計画であるアジェンダ 21 が採択された年である。それに対して IGU はいち早く地理教育のアピールをした。また 1997 年にはギリシャのテサロニキにおいて環境と社会に関する国際会議 (テサロニキ会議) の開催、続いて 2000 年の IGU よる「International Declaration on Geographical Education for Cultural Diversity (文化多様性のための地理教育国際宣言)」, 2002 年には南アフリカ共和国のヨハネスブルクで持続可能な開発に関する世界首脳会議 (ヨハネスブルクサミット) が開催され、アジェンダ 21 の実施計画を検証して新たな行動計画の策定が求められ、「国連持続可能な発展のための教育の 10 年」(The UN Decade of Education for Sustainable Development: 略称 DESD) が提案された。これらの動きに対して、Haubrich は敏感な対応をとり、ユネスコが ESD に取り組むと、2007 年に「Lucerne Declaration On Geographical Education for Sustainable Development (持続可能な発展のための地理教育に関するルツェルン宣言)」を

策定した。このように IGU 地理教育委員会は、他教科に先駆けて ESD を地理教育で行うことを強調することによって地理教育の存在価値をアピールした。これらの一連の活動において、Haubrich のリーダーシップのもとで Schleicher (ヴァインガルテン教育大) が情報通信技術 (Information and Communication Technology : ICT) 教育を担当するなど、IGU の地理教育委員会の活動においてドイツの地理教育が重要な役割を果たしたといえよう。

地理教育国際憲章とルツェルン宣言とを比較すると、前者は環境学習などの地球的課題については地理教育が担当することをアピールしていたが、ルツェルン宣言では、ユネスコによる ESD のガイドラインに従って、他教科との連携によるクロスカリキュラムが提言されているため、ルツェルン宣言では地理教育と他教科とのクロスカリキュラムへと変化している。地理学の学際性が ESD において重要な役割をさらに強く主張できている。

ドイツにおける ESD の活動は、草の根的な活動を組み立てていくボトムアップ形式の活動であり、現場に立つ教師たちによる自主的な研究・研修の場となっている。ドイツにおける ESD の取り組みの一つとして「Transfer-21」があげられる。「Transfer-21」は、ドイツの学校の 10 パーセントで ESD を実施することや指導者育成などを目標としたプログラムで、ESD の学校教育への浸透に貢献している。その成果は EGU (ヨーロッパ地球科学連合) での ESD に関するワークショップ開催、「国連持続可能な発展のための教育の 10 年 (DESD)」のユネスコの中間報告会としての国際会議開催 (2009 年、ボン) にみられるように、ESD へのドイツ地理教育の積極的かつ活発な取り組みが国際的にも評価されたものといえる。

また、ヨーロッパ域内における高等教育の標準化の流れは HERODOT (Network for Geography in higher education) による報告書 (2007 年) にも掲載されており、このなかには大学だけではなく学校教育における地理教育の標準的ス

クールカリキュラムや ICT の導入なども提唱されている。また、同じ 2007 年には Deutsche Gesellschaft für Geographie (DGfG) が「Deutsche Gesellschaft für Geographie (Educational Standards in Geography for the Intermediate School Certificate)」を出し、州ごとにカリキュラムが異なっているドイツにおいて、統一的な地理教育の指針となるナショナルスタンダードが提示された。この「Deutsche Gesellschaft für Geographie」には、Global learning (国際理解教育) と同様に地理教育が ESD に関与することが明記されている。これらの動きに対して、ドイツ地理学会は国際地理学連合地理教育委員会での活動をもとに積極的にに関わり、ナショナルスタンダードには地理教育国際憲章とルツェルン宣言の内容が含まれている。

上記のような地理教育の変化に対して、ギムナジウム等の中等教育の教員養成をする大学と初等教育の教員養成をする Pädagogische Hochschule はこれまで連携が強くなかったようであるが、標準的スクールカリキュラムの作成や ESD に関連した活発な研究動向をみると、両者の連携が強くなったといえる。

VI. 日本との関わり

個々の地理学者による日本とドイツの地理学者の交流は枚挙にいとまがないが、組織としては日独地理学会議を中心に交流活動が継続されている。第 1 回は、1969 年 7 月 16 日～20 日にドイツのボーフムで開催され、人口地理学をテーマとして 10 名の日本人研究者が参加した。会議の記録は、Schöller (1970) として刊行されている。それ以降 2010 年の第 10 回大会まで、ほぼ 4～6 年間隔で日本とドイツで交互に開催されている (表 4 参照)。これまでの大会開催状況は、日独双方の参加者数に変動があるものの、継続されていることに主催者の努力が高く評価される。

日本をフィールドとして研究している代表的地理学研究者は、Flüchter (デュイスブルク大) である。また、ドイツ日本研究所に在籍していた Lützel (ボン大) は日本の都市・都市住宅問題

表 4 日独地理学会の系譜.

Table 4 The chronicle of Japanese-German Geographical Conference.

	日程	主要開催地	テーマ	会議内容	参加人数	会議の記録
第1回	1969年 7月16日～ 20日	Bochum	「人口地理学の諸問題」	研究発表と巡検 (Niedersachsen: ハノー ファー, ルーレル地域など)	日本人10名, ドイツ人14名	Schöller, P. (1970): Problem der bevölkerungs-geographie in Japan und Deutschland: bericht über ein deutsch-japanisches kolloquium zur bevölkerungsgeographie vom 16. bis 19. Juli 1969 in Bochum. <i>Geographische Zeitschrift</i> , 55, 35-40.
第2回	1971年 9月22日～ 25日 (草津) 同年 9月26日～ 10月1日 (八王子)	草津, 八王子	「Space and mobility: 空間とモビリティ アティー中心都市郊外の変化パターン」	研究発表と巡検 (京都 市, 草津市, 武蔵野石 地, 多摩ニュータウン, 相模原市など), ポスト コンGRES・エクスカー ション: 瀬戸内・四国 10月4日～9日	日本人32名, ドイツ人12名	Schöller, P. (1972): Problem der verstärkung in Japan: bericht über die 2. japanisch-deutsche geographenkonferenz mit gemeinsamer felderforschung in japanischen stadtregionen vom 21. 9. - 11. 10. 1971. <i>Geographische Zeitschrift</i> , 40, 218-227. 矢沢大二 (1972): 第2回日独地理学研究会の記録: 日独地理学を結ぶ巡検 矢沢大二, 地理, 17(1), 153-169. 竹内啓一 (1972): 第2回日独地理学研究会のこと. 一橋論叢, 67(1), 112-127.
第3回	1976年 8月11日～ 19日	Günne (Möhnesee) & Straelen (Niederrhein)	「Tradition und fortschritt in der landesentwicklung: 国土発展の伝統 と進歩」(農村に重点)	研究発表と巡検 (ルーレル地域)	日本人13名, ドイツ人等16名	Schöller, P. (1977): Tradition und fortschritt in der landesentwicklung: bericht über die 3. japanisch-deutsche geographen-seminar. <i>Geographische Zeitschrift</i> , 65, 46-48. シエラー・矢沢大二 (1977): 第3回日独地理学研究会報告. 地理学評論, 50, 253-256.
第4回	1982年 3月17日～ 30日	東京, 大阪	「Tradition und fortschritt in der landesentwicklung: 国土発展の伝統 と進歩」(大都市に重点)	研究発表と巡検, ポス トコンGRES・エクス カーション: 本州中部・ 北陸	日本人76名, ドイツ人等12名	Fluchter, W. (1986): Tradition und fortschritt in der landesentwicklung: persistenz traditioneller werte und strukturen in den stadtsystem Japans und Deutschlands. bericht über das 4. und 5. deutsch-japanische geographen-seminar. <i>Geographische Zeitschrift</i> , 74, 94-105.
第5回	1984年 8月10日～ 18日	Hannover & Bochum	「Persistenz traditioneller werte und strukturen in den stadtsystemen Japans und Deutschlands: 都市シス テムにおける伝統的価値と構造の持続」	研究発表と巡検	日本人28名, ドイツ人19名	同上
第6回	1988年 3月17日～ 23日	名古屋	「地理的立地と地域開発についての 現実的諸問題: Actual problems of geographical locations and regional development in Japan and West Germany」	ポストコンGRES・エ クスカーション: 四国・ 九州 3月24日～30日	日本人54名, ドイツ人等20名	藤田佳久 (1989): 第六回日独地理学会議-名古屋集會から. 地理, 34(12), 96-98.
第7回	1992年 8月16日～ 27日	Heidelberg & Duisburg	「拡大するヨーロッパ」	研究発表と巡検, アル ザス巡検, 旧東ドイツ 巡検	日本人25名, ドイツ人20名	Fluchter, W. ed. (1995): <i>Japan and Central Europe Restructuring: Geographical Aspects of Socio-economic, Urban and Regional Development</i> . Verlag Harrassowitz. 山本健児 (1993): 拡大するヨーロッパをめぐって (第7回日独地理学会議 報告 (1992年8月開催), 於ハイデルベルク, デュースブルク). 地理, 38(3), 86-93.
第8回	1998年 3月15日～ 19日	八王子	「ナショナル・リージョナル・ロー カルな発展のためのアプロロチの持 続性: Sustainability as an approach for national, regional and local development in Japan and Germany」	研究発表と巡検, 中国 地方巡検	日本人32名, ドイツ人15名	The organizing committee of the 8th Japanese-German geographical conference ed. (1998): <i>Sustainability as an approach for national, regional and local development in Japan and Germany</i> .
第9回	2004年 3月30日～ 9月1日	Bochum	「Shaping the future of metropolitan regions in Japan and Germany: governance, institutions and place in new context: 大都市地域の未来」	研究発表と巡検, ポス トコンGRES・エクス カーション: ベルリン 9月2日～6日	日本人16名, ドイツ人20名	Fluchter, W. and Feldhoff, T. eds. (2005): <i>Shaping the future of metropolitan regions in Japan and Germany: governance, institutions and place in new context</i> . University of Duisburg-Essen.
第10回	2010年 3月21日～ 3月23日	大阪	格差拡大時代における新たな文化景 観の形成-日独比較-	研究発表と巡検, ポス トコンGRES・エクス カーション: 紀伊半島 3月23日～25日	日本人20名, ドイツ人等6名	大場茂明 (2010): 格差拡大時代における新たな文化景観の形成-日独比較- 大場茂明, 福武学術文化振興財団助成事業報告書. http://www.fukutake.or.jp/science/assist/report/08/pdf/08cpl_ooba.pdf [Cited 2011/12/28] ヒエラルド・コルナトゥスキ (2010): 第10回日独地理学会議「格差拡大時代における新たな文化景観の形成」(集會開催報告). 大阪市立大学都市研 究プラザニューズレター, 7. http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/Newsletter7_20100501.pdf [Cited 2011/12/28]

を研究テーマとしており、Hohn（ルール大）は日本の都市計画をテーマとして学位論文を刊行している。Flüchter と Lützelers は、ヨーロッパ日本研究学会（EAJS）において日本の都市をテーマとしたセッションを継続的に開催しており、日本の若手研究者との交流の活性化が期待される。ドイツ人による日本研究者数に比べて、ドイツをフィールドとした日本人による地理学研究は、最近数年間の主要雑誌掲載論文をみても、山本（1993, 1995, 2006, 2007, 2009 など）、大場（2003, 2007 など）、伊藤（2003, 2009 など）、などの多くの蓄積がある。今後は日独地理学者による共同研究の増加と、研究交流のより一層の活発化が望まれる。一方、ドイツでは大学の改組の進行によって日本の地理学研究の中心的役割を担っていたデュイスブルク大のように、日本研究組織が東アジア研究組織に組み込まれるなどの変更が進められており、日本を対象とした単独の研究組織ではなくアジア研究組織の一部に埋没してしまう懸念もある。

VII. まとめにかえて

ドイツ地理学の動向は、森川（1972）による「西ドイツ・オーストリアにおける地理学の研究動向について」、水津（1974）による『近代地理学の開拓者たち』が相次いで発表され、地理学の大家についても、国松（1976）による『リヒト・ホーフエン 地理学の課題と方法』などの成果が刊行されている。また、1950年代から1960年代にかけては西川（1988）による『地球時代の地理思想—フンボルト精神の展開—』のII章6節「フンボルト没後百年現在のドイツ地理学」において、詳細に研究動向が記されている。続いて、森川（2004）は『人文地理学の発展—英語圏とドイツ語圏との比較研究—』のII章「ドイツ語圏における人文地理学の発展」において、第二次世界大戦後のドイツ語圏地理学の体系と社会地理学について詳細な分析がされている。また、藪内（1977）『社会地理学論争—人文地理学の場合—』、山本（1981）による「ある社会地理学の軌跡—ハルトケ学派の場合—」、堤（1992）「ド

イツ社会地理学の系譜—社会地理学論争の周辺—」などのドイツ社会地理学の動向に関する研究蓄積のほかにも、水岡（1978）による西ドイツのラジカル地理学運動・社会地理学の動向に関する文献がある。

西川（1988）によると、1959年にアレクサンダー・フォン・フンボルト没後百年忌祭が国際的規模で盛大に挙行されたが、その頃のドイツの地理学について以下のように述べている。「フンボルト、リッター百年祭に象徴されているように、ドイツの地理学は深い伝統に根ざして、近代地理学誕生の国にふさわしいみごとな発展を世界に誇っている。このことは学術出版物の目録を概観しただけでも、すぐに承認されるであろう。まず特筆すべきは、ドイツ地誌中央委員会の一貫した出版事業である」（p.70）。西川は「ドイツ地誌研究」の名のもとに、すぐれた研究成果の蓄積がみられ、それらの成果が地誌学の重点の置き方、地理学的方法の進歩の跡などに如実に反映されていると評価している。また、ドイツ地誌学の動向に関しては森川（1997）に詳しく紹介されている。

本稿では近年のドイツにおける地理学の動向について一側面からしかみることができていないが、伝統的地誌研究・地図学を継続しながらも、ドイツにおける地理教育改革運動を背景として、新しい地誌学や環境運動などへの積極的な関与などの草の根的な活動を基盤として、国際地理学連合地理教育委員会でイニシアティブをとり、地理教育国際憲章やルツェルン宣言などの作成に多大な貢献をしている。また、学会活動においてもどちらかというドイツ語圏にとどまりつつあったドイツ地理学が、『*Erdkunde*』にみられるように英語による研究成果を増やすことによって国際的なアピールへと展開しつつある状況と考えられる。

注

- 1) Bobek や Blotvogel, Werlen, Wardenga らもこのことを認めている（森川, 2004: 46）。
- 2) Werlen は「ポストモダン社会」の代わりにこの用語を用いる。
- 3) 『*Erdkunde*』誌については総目次において分野や研究対象地域ごとに分類されていたため、それが入

手できなかった2010年を除いて、総目次の分類を利用した。『Die Erde』誌、『Geographische Zeitschrift』誌については、本文の内容ではなく題目だけによる分類をしたので、分野別の分類としては不完全かも知れない。

謝 辞

本文の執筆にあたり、山本健児先生、大場茂明先生、小林浩二先生、山本 充先生、Dieter Gross 先生にはドイツの地理学および地理教育の研究動向に関してご教示いただいた。記して感謝いたします。

文 献

- Bargel, T., Multrus, F. und Ramm, M. (2008): *Studien-situation und studentische Orientierungen. 10. Studierenden-survey an Universitäten und Fachhochschulen*. Kurzfassung. Bundesministerium für Bildung und Forschung.
- Bartels, D. (1968): *Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung einer Geographie des Menschen*. Franz Steiner Verlag.
- Bartels, D. (1980): Die Konservative Umarmung der "Revolution" zu Eugen Wirths Versuch in 'Theoretischer Geographie'. *Geographische Zeitschrift*, **68**, 121-131.
- Blotevogel, H.H. (2000): Geographische Erzählungen Zwischen Moderne und Postmoderne. in *lokal verankert-weltweit vernetzt. 52. Deutscher Geographentag Hamburg 1999* edited by Blotevogel, H.H., Oßenbrügge, J. und Wood, G., Franz Steiner Verlag, 465-478.
- Blotevogel, H.H., Heinritz, G. u. Popp, H. (1986): Regionalbewusstsein, Bemerkungen zum Leitbegriff einer Tagung. *Berichte zur deutschen Landeskunde*, **60**, 103-114.
- Blotevogel, H.H., Heinritz, G. u. Popp, H. (1987): Regionalbewusstsein—Überlegungen zu einer geographisch—landeskundlichen Forschungsinitiative. *Informationen zur Raumentwicklung*, **7/8**, 409-418.
- Bobek, H. (1948): Stellung und Bedeutung der Sozialgeographie. *Erdkunde*, **2**, 118-125.
- Bobek, H. (1957): Gedanken über das logische System der Geographie. *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft Wien*, **99**, 122-145.
- Bobek, H. u. Schmidthusen, J. (1949): Die Landschaft im logischen System der Geographie. *Erdkunde*, **3**, 112-120.
- クリスタラー著、江沢譲爾訳 (1969): 都市の立地と発展. 大明堂. Christaller, W. (1933): *Die zentralen Orte in Süddeutschland*, Jena. [Christaller, W. (1969): *Urban Location and Development (Toshi No Ricchi To Hatten)* translated by Ezawa, J., Tai-meido (in Japanese)*]
- Fachverband Geowissenschaften (1970): Bestandsaufnahme zur Situation der deutschen Schul- und Hochschulgeographie. *Verhandlungen des Deutschen Geographentages*, **37**, 191-207. Wiederabdruck in (reprinted in) *Probleme der Länderkunde* edited by Stewig, R., 1979, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 157-185.
- フンク カロリン (2009): フンボルトの悪夢? ブローニヤ・プロセスとドイツにおける大学教育改革. 欧米文化研究, **16**, 19-37. [Funk, C. (2009): Humboldt's nightmare? The Bologna process and university reform in Germany. *Studies in European and American Culture*, **16**, 19-37. (in Japanese with English abstract)]
- Hartke, W. (1956): Die "Sozialbrache" als Phänomen der geographischen Differenzierung der Landschaft. *Erdkunde*, **10**, 257-269.
- Hartke, W. (1959): Gedanken über die Bestimmung von Räumen gleichen sozialgeographischen Verhaltens. *Erdkunde*, **13**, 426-436.
- 伊藤徹哉 (2003): ドイツにおける都市更新事業に伴う住宅地域変容: 1970年代以降のニュルンベルクを事例として. 経済地理学年報, **49**, 197-217. [Ito, T. (2003): The physical and social changes in the urban residential areas redeveloped by urban renewal projects in Germany: A case study of Nuremberg since the 1970s. *Journal of Economic Geography*, **49**, 197-217. (in Japanese with English abstract)]
- 伊藤徹哉 (2009): ミュンヘンにおける都市再生政策に伴う空間再編. 地理学評論, **82**, 118-143. [Ito, T. (2009): Urban reconfiguration through urban renewal policies in Munich. *Geographical Review of Japan*, **82**, 118-143. (in Japanese with English abstract)]
- 国松久弥編 (1976): リヒトホーフエン 地理学の課題と方法. 古今書院. [Kunimatsu, H. ed. (1976): *Richthofen: Its Issues and Methods (Richthofen: Chirigaku No Kadai To Hoho)*. Kokon Shoin. (in Japanese)*]
- Lichtenberger, E. (1978): Quantitative geography in the German-speaking countries. *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, **69**, 362-373.
- 水岡不二雄 (1978): 西ドイツの「ラジカル地理学」運動. 地理, **23**(1), 93-100. [Mizuoka, F. (1978): Radical geography in west German. *Chiri*, **23**(1), 93-100. (in Japanese)*]
- 水岡不二雄 (1981): ドイツ連邦共和国の地理教育改革. 地理学評論, **54**, 177-195. [Mizuoka, F. (1981): The reform of geography education in the Federal Republic of Germany. *Geographical Review of Japan*, **54**, 177-195. (in Japanese)]
- 森川 洋 (1972): 西ドイツ・オーストリアにおける地理学の研究動向について. 人文地理, **24**, 643-670. [Morikawa, H. (1972): On the trends of recent studies of geography in West Germany and Austria. *The Human Geography (Jinbun Chiri)*, **24**, 643-670. (in Japanese)]
- 森川 洋 (1997): ドイツにおける地誌学の研究動向. 地誌研年報 (広島大学総合地誌研究資料センター),

- 6, 15-50. [Morikawa, H. (1997): Recent progress in German regional geography. *Annual Report of Research Center for Regional Geography*, 6, 15-50. (in Japanese)]
- 森川 洋 (2004): 人文地理学の展開—英語圏とドイツ語圏との比較研究. 古今書院. [Morikawa, H. (2004): *The Evolution of Human Geography: Comparative Study of English-speaking World and German-speaking World (Jinbun Chirigaku No Tenkai: Eigoken To Doitsugoken Tono Hikakukenkyu)*. Kokon Shoin (in Japanese)*]
- 西川 治 (1988): 地球時代の地理思想—フンボルト精神の展開—. 古今書院. [Nishikawa, O. (1988): *Geographical Thought in Global Era: The Evolution of Humboldt Spirits (Chikyū Jidai No Chiri Shiso: Humboldt Seishin No Tenkai)*. Kokon Shoin. (in Japanese)*]
- 大場茂明 (2003): 近代ドイツの市街地形成—公的介入の生成と展開—. ミネルヴァ書房. [Oba, S. (2003): *Forming Built-up Areas in Modern Germany (Kindai Doitsu No Shigaichi Keisei: Koteiki Kainyu No Seisei To Tenkai)*. Minerva Shobo. (in Japanese)*]
- 大場茂明 (2007): 衰退工業地域における総合地区開発—デュースブルク市マルクスロー地区を事例として—. 地理科学, 62, 177-187. [Oba, S. (2007): Development of the joint socially integrative city initiatives in the depressed industrial area: The case of Duisburg-Marxloh, Germany. *Geographical Sciences (Chiri Kagaku)*, 62, 177-187. (in Japanese)]
- Popp, H. (1983): Geographische Landeskunde—was heisst das eigentlich?. *Berichte zur deutschen Landeskunde*, 57, 17-38.
- Schöller, P. (1970): Problem der Bevölkerungsgeographie in Japan und Deutschland. *Geographische Zeitschrift*, 58, 35-40.
- Schöller, P. (1984): Territorialität und räumliche Identität. *Berichte zur deutschen Landeskunde*, 58, 34-44.
- 水津一朗 (1974): 近代地理学の開拓者たち. 地人書房. [Suitsu, I. (1974): *Pathbreaking Geographers in Modern Era (Kindai Chirigaku No Kaitakusyatachi)*. Chijin Shobo. (in Japanese)*]
- Thomale, E. (1984): Social geographical research in Germany—a balance sheet for the years 1950-1980. *GeoJournal*, 9, 223-230.
- 堤 研二 (1992): ドイツ社会地理学の系譜—社会地理学論争の周辺—. 人文地理, 44, 262-283. [Tsutsumi, K. (1992): Eine Schule der deutschen Sozialgeographie: Debetten und kritische Beurteilungen über Sozialgeographie. *The Human Geography (Jinbun-Chiri)*, 44, 262-283. (in Japanese)]
- Verband der Geographen an Deutschen Hochschulen (2011a): Geographische Institute. http://vgdh.geography-in-germany.de/?page_id=536 (Cited 2011/7/1).
- Verband der Geographen an Deutschen Hochschulen (2011b): Masterstudiengänge Geographie. http://vgdh.geography-in-germany.de/?page_id=1007 (Cited 2011/7/1).
- Wardenga, U. (2000): Jenseits des Einheitsparadigmas? in *Lokal verankert — weltweit vernetzt*. 52. *Deutscher Geographentag Hamburg 1999* edited by Blotvogel, H.H., Ossenbrügge, J. und Wood, G., Franz Steiner Verlag, 491-496.
- Weichhart, P. (1997): Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Benno Werlens Neukonzeption der Humangeographie. *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft*, 139, 25-45.
- Werlen, B. (1995): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.1: Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum*. Franz Steiner Verlag.
- Werlen, B. (1997): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierung. Bd.2. Globalisierung, Region und Regionalisierung*. Franz Steiner Verlag.
- Werlen, B. (2010): *Gesellschaftliche Räumlichkeit 2 Konstruktion geographischer Wirklichkeiten*. Franz Steiner Verlag.
- Wirth, E. (1979): *Theoretische Geographie. Grundzüge einer theoretischen Kulturgeographie*. Teubner.
- 戴内芳彦 (1977): 社会地理学論争—人文地理学の場合—. 古今書院. [Yabuuchi, Y. (1977): *Disputation for Social Geography: In the Case of Human Geography (Shakai Chirigaku Ronso: Jinbun Chirigaku No Baai)*. Kokon Shoin. (in Japanese)*]
- 山本健児 (1981): ある社会地理学の軌跡—ハルトケ学派の場合—. 人文地理, 33, 334-351. [Yamamoto, K. (1981): A trace of a social geographical school: In the case of W. Hartke and his disciples. *The Human Geography (Jinbun Chiri)*, 33, 334-351. (in Japanese)]
- 山本健児 (1993): 現代ドイツの地域経済—企業の立地行動との関連. 法政大学出版局. [Yamamoto, K. (1993): *Regional Economy of Contemporary Germany: Its Relationship with Locational Behavior of Corporations (Gendai Doitsu No Chiiki Keizai: Kigyo No Ricchi Kodo Tono Kanren)*. Hosei Daigaku Shuppankai. (in Japanese)*]
- 山本健児 (1995): 国際労働力移動の空間—ドイツに定住する外国人労働者. 古今書院. [Yamamoto, K. (1995): *The Space of International Migration: Settling Foreign Workers in Germany (Kokusai Rodoryoku Ido No Kukan: Doitsu Ni Teiju Suru Gai-kokujin Rodosha)*. Kokon Shoin. (in Japanese)*]
- 山本健児 (2006): ミュンヘン市外国人評議会選挙とこれをめぐる言説の再検討—社会地理学的分析—. 地誌研年報 (広島大学総合地誌研究資料センター), 15, 69-102. [Yamamoto, K. (2006): Election of foreigners' advisory council of Munich and re-examination of discourses concerning election from viewpoint of social geography. *Annual Report of Research Center for Regional Geography*, 15, 69-102. (in Japanese with English abstract)]
- 山本健児 (2007): ドイツの都市政策における「社会的

都市プログラム」の意義, 人文地理, **59**, 205-226.
[Yamamoto, K. (2007): Significance of the 'socially integrative city program' in the urban policy of Germany. *Japanese Journal of Human Geography (Jinbun Chiri)*, **59**, 205-226. (in Japanese with English abstract)]

山本健児 (2009): ドイツの都市内社会的空間的分極化は激化したか?—ドルトムント市の事例—. 地理学

評論, **82**, 1-25. [Yamamoto, K. (2009): Has social and spatial polarization intensified in German cities?: The case of Dortmund. *Geographical Review of Japan*, **82**, 1-25. (in Japanese with English abstract)]

* Title etc. translated by Y.Y.

(2011 年 10 月 11 日受付, 2012 年 3 月 14 日受理)